羽二重（はぶたえ）産業の発展

小松町を中心とする能美郡や、大聖寺町を中心とする江沼郡では、古くから加賀絹と称する白無地の絹が生産されていたが、明治二十年代になると、石川県は福井県などとともに、比較的単純な絹織物である羽二重の生産が発展した。石川県で最初に羽二重が製織されたのは、明治十六年（一八八三）に小松町の岸本利助らによる試織であった。その後、明治十九年には能美郡長が群馬県桐生の星野伝七郎を小松町に招いて指導に当たらせ、根上村の新田甚左衛門はこの機に小松町字小馬出町に機業改良会社を設立した。さらに同じ頃、岸本利助らも小松町字泥町に機業場を設置して、輸出羽二重の製織を開始した。このように石川県の羽二重製織は小松町を発端として、以後、金沢などに普及していったのである。

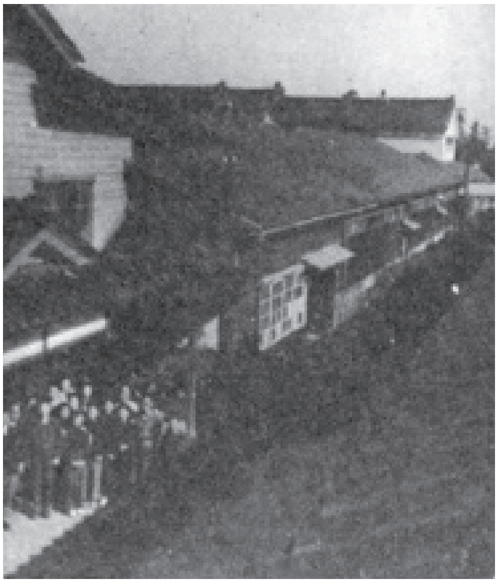
ジャカード隆盛記念塔（芦城公園）

昭和32年の織物工場の様子（池田機業（株）提供）

　したがって、明治二十年代には羽二重生産は県内では伝統的な絹産地であった能美郡や江沼郡の比重が著しく高かったが、明治三十年代になると金沢市やその周辺地域での生産額が急増していった。

　絹織物の生産は小規

模な場合が多く、当初は手織機による生産であった。それでも輸出羽二重の生産は相対的に規模の大きい工場で主に行われ、家内工業のような小規模な作業場では内地向け織物が主に製織された。技術も次第に進歩してゆき、明治三十五年にはジャカード機による紋織物生産が始まり、輸出紋羽二重などがつくられ、さらに明治四十一年から力織機が小松地方でも普及していった。現在も芦城公園に、明治四十二年に建てられたジャカード隆盛記念塔がある。ただし力織機は小松地方では相対的にゆるやかな速度で普及し、それと対応して明治末・大正期頃から小松ではやや複雑な内地向け絹織物の生産の比重が再び回復していった。さらに昭和に入ると人絹織物の生産が急速にさかんになり、第二次大戦後の昭和三十年代には合繊織物の生産も急増していった。


昭和21年、小松精練の当時の殿町工業を背景に記念撮影（『四十年のあゆみ』より）

松梨町にあった昭和初期の織物工場外観（『小松市制60周年記念誌』より）のこぎり形の屋根が特徴。

機織図（浜佐美本町　八幡神社所蔵）

右の写真は、明治三十四年に「梅田機業場」により浜佐美本町の八幡神社に奉納された額である。前年にはそれまで順調に発展していた北陸羽二重業においても、日清戦後恐慌によって多くの機業家が大打撃を受けた。自力では如何ともしがたい景気変動の波を乗り越えられるようにと、神の加護を祈ったのであろう。

（松村　敏）